

招待席

石濱 金作

いしはま きんさく 作家 1899.2.28 - 東京の現中央区木挽町に生まれる。川端康成とは「なにをするにもいつしよ」の親しさで第六次「新思潮」同人となり、帝大在学中に菊地寛の「文藝春秋」編集同人に加えられストレートな持ち味の創作を続けたが、昭和十一年(1936)頃より戦後へかけ文壇から遠ざかった。中河与一は石濱を「スナホで高潔で気品のある淡水魚族」と評した。掲載作は、大正十四年九月「文藝時代」に初出、こころもちとがった心境を飾り気なく、むしろ柔らかかに描いている。

ある死ある生

—

人間の死んでゆくところを見た話は自分は沢山聞いたが、その中でどういふものか友人A君のして呉れた話が、自分には一番鮮やかに記憶にのこつてゐる。それは次のやうな話だ。

(季節のうちで、自分は夏から秋に移る頃が一番好きだ。八月の末になると、日本にはよく颱風が来る。夜明け方から来たり、また夕暮時から初まつたりして、その通つたあとは、全く天気が一新する。他の季節のうちで、この夏から秋に移る時位際立つて季節の歩みが感じられる時はない。

さういふ日の或る夕方だつた。朝から初まつた暴風雨が夕方に止んで、夕残りの雲が時々まだ雨を降らせ乍ら空を急いでゐたが、その僅かのはれ間を盗んで、一人の男が裏の水溜りに出て、立つて水面を眺めてゐた。おほかた雨で水かさが増して、近所の溝から魚でも流れ込んだのだらう。男は暫くして、鳥渡(ちよつと)腰をかがめて、もう一度水面をすかし見るやうにしたが、今度は立つて、すたすたとすぐうしろにある家の戸口へ這入つていつた。さやう、水溜りの水際から、その男の這入つていつた家の戸口まで、ものの四五間(けん)も

あつたらうか。

暫くすると、また男が出てきた。矢張り先刻の男で、手に長い電燈のコードのやうなものを持つてみた。妙な事をすると思つて見てみたが、すると男はそれを、一端は今出てきた家の戸口の中につないであるらしく、他の一端を持つて、輪にしたそれをほどき乍ら、水溜りの水際の方へと近寄つて行つた。

自分はそれ迄別に気を止めて見てみたわけではなかつたが、その時から、鳥渡興味を持つた。あの男は一体何をするのだらう、さう思つて見てみると、その男は水際にしやがんで、今のコードのやうなもの尖きに何かを結(ゆは)へつけてあるらしかつた。

自分は益々興味を持つた。その男の何か自分のたくらみに熱心してゐるらしい様子が、充分傍からでも見てとれたからである。すると男は立上つた。そして右手に今結へた何か鉄板のやうなものぶらさがつてゐるコードのさきをつかまへて、左手で家とつながつた部分を二三度バタバタと試すやうにゆすつてみて、それから家に尻を向けて、水に向つてコードに結へつけた鉄板のやうなものをザブリと投げ込んだ。

恐らく誰もこんな仕技(しわざ)を見た事はあるまい。子供が紐に石を結へつけて悪戯(いたづら)に投げ込むのなら兎(と)に角、大の男が家から引つぱつてきた針金に鉄板をつけて水かさの増した水溜りに投げ込むなどといふ事は。

これは変な事をする、と自分はその時妙に何か警戒するやうな気持になつた。兎に角只の事をするのではないといふ事は、その男の余り熱心になつてゐる姿からでも充分わかつた。

と、男はとんとんとんと走つて、家の戸口へ馳(か)け込んだ。馳け込んだと思ふとすぐまた、大急ぎで戸口を出て、今度は前よりも余程緊張した形で水際に馳け寄つた。

君は一体この男が何をしてみたのだと思ふ。電気を引いたのだ。これはあとで解つた事だが、電気を水に引いて、浮いてゐた魚を殺さうとしたのださうな。考へたものぢやないか。この男は水は電気の良導体だといふ事をよく知つてゐたものと見える。それにこれもあとで聞いた話だが、その男は常から電気をいぢるのが好きで、電気器具の小さいのをよく買つてきてはいたづらするのが道楽だつたさうな。この魚を殺さうとした時に用ひたコードも、矢張りその前から買つて持つてみたのださうだ。あのしまひに家へとんとんと馳け込んだ時は、水に導いたコードにスイッチを切りに行つたんだ。

それは兎に角、自分はその男がスイッチを切つておいて再び水際へ馳けて行つた時、その瞬間、瞬間的にだが妙な可恐(こは)さを感じた。勿論電気を引いておいてスイッチを切つたなどといふ事は知らなかつたのだが、それでも非常に妙な可恐さを感じた。いや、寧(むし)ろ、電気を引いてゐるのだといふ事が

解れば、案外そんなに可恐い気がしなかつたかも知れない。けれどもそんな事は知らないから、その男は一体何をするのか見当がつかなくつたのだ。人間は、人が余りに異常な事に熱中してゐるのを見ると、妙に息のつまるやうな危なさを感じるものだが、自分もあの時確かに危な気(げ)を感じた。

自分は益々その男の行ひを見てゐた。男は水際に立つて、ぢつと水面を見つめてゐる。彼はもはや、自分が引いたコードの事も、そのコードのつながつてゐるうしろの家の事も、まるで念頭にないやうな様子であつた。と、男の全身が突然華やかに笑つた。いや、さう見えたのだ。確かに彼は全身で笑つた。それが自分の所からも実にはつきりさうわかつた位だ。その時は恰度(ちやうど)もう余程日暮れの明るみも薄くなつてゐたが、自分にはその男の満足さが、実にはつきりとわかつた位その男は全身で満足さうに笑つたのだ。

自分はその時の印象が深くのこつてゐる。自分のその時までの、どちらかと云へば暗くなつてゐた気持も、その瞬間で美事に晴れた。自分はその時、まだ確かに彼のやつてゐた事が解つたわけではなかつたが、それでも妙に解つたやうな気がした。そして安心した。《あとで聞いた話から考へると、その時彼の計画が成功して、最初の魚が死んで白い腹を出して浮び上つたらしいのだ。》

しかし実は、自分はまだその男のやつてゐた事がよく解つてはゐなかつたのだ。自分は自分の気分が軽くなると、今度は急にその男のやつてゐる事が知りたくなつた。自分は家を出て、その男の所へ行つてやらうかと考へた位である。ところが自分がまだそれをしない間に次の事件が起つたのだ。

男は喜んだかと思ふと、サッと尻をまくつて水に入つた。ああ何故彼はそんな事をしたのだらう！ いや、男がさうしたのは無理もない、自分でさへその時何の危険も感じなかつた位なもの！ しかし男はとうとう感電してその場に倒れて了つたのだ。水に足をひたすと同時に、男は両手を稲妻のやうに震はせてそのままそこに倒れて了つたのだ。……)

友人Aの話はこれだけである。その男が感電して倒れると同時に、Aはそこへ飛んで行つて人々を呼び集めて、その男を抱き上げたさうだが、その時その男の先刻出入りした家の戸口へ行つてスイッチを切つたのはAであつた。Aは若(も)し自分がそれを気付かなかつたら、自分はもとより更に何人の人が死んだかも知れなかつたと云つて暗い顔をした。実際Aはよくやつたものである。私はAからその話を聞いた時、Aの顔を見て涙ぐんだ。そして、それが若(も)しAでなくつて、もつと他の落付きを欠いた人であつたら、と考へると、自分は気分が暗くなる。

(さてこれでこの話は終つたので、私の小説も此処で止めておく方が花であるかも知れないが、これでは約束しておいた予定の枚数に大分足りないなので、更

に第二の話を附加する。)

二

Aの話は、話それ自身及びその話の中の事件に加つたA自身の態度などから、私には人間に関するいろいろな暗示が得られた。例へば、前の話の中で、常から電気に興味を持つてそれに熱中してゐた男が、颱風の後の雨やみを盗んで、日頃から考へてゐた彼の新しい実験をやつてみようと思つた事、それからその実験の着手に際して払つた熱心さ、それからその実験が成功した時の最初の喜び、しかもその喜びの爲めに身を誤つて殺して了つた事、更に今喜んだ人間が次の瞬間に余りにも脆(もろ)く死んで了つたといふ事、それからA自身の話にしてみれば彼が最初にその男の余りな熱心とその仕事の余りな異常さの故に抱いた感覚的な恐れ of 気持ち、それから更にその男の喜びを見て自分も急に心を明(あかる)くしたといふ話、それから最後にその男を助ける時にスヰッチを切つておくのを忘れなかつた落付と洞察、さういふものは、すべてこれこの人生に於けるさまざまの形相の表象暗示でなくて何んであらう。それ故にAの話は私の涙を誘つたのだ。

さて次に友人Bの話を書せよう。Bは実は自分は余り好まない友だ。好まないけれども敢へて憎む理由はない。Bは話した。

(僕がその女を知つたのは実に變つた機会からなのだ。それといふのも僕が大胆だつたからだがね。大胆はこの世の享樂に欠くべからざるものだ。

或る夜或る街角の骨董屋の飾り窓の前に立つて、女がひとりその中にある黄焼きの壺を眺めてゐた。その辺は一帶に賑やかな通りで、どの店にも相当の人だかりがしてゐたが、その中でその骨董屋の飾り窓の前に立つてひとり壺を眺めてゐる女の姿は特別に僕の目を惹いた。だつて君、それが若い女なんだからね。若い女がたつた一人で淋しさうに骨董屋の黄焼きの壺を眺めてゐるんだからね。

それは兎に角、僕はこの女を眺めてゐるうちに、それがこの賑やかな夜の街の中に落された一点の静けさの表象のやうに思はれ出したんだ。僕はかういふ女には何処か必ず變つた面白いところがあるに違ひないとその瞬間考へた。見ると女は矢張り壺の前に立つて、ウヱンドウの硝子を通して、その硝子だけが彼女のほのかな邪魔物であるかのやうな姿で眺めてゐる。僕はつかつかと女の所へ近寄つて行つた。そして云つた。

「あなたのやうな、若い女の人がこんな賑やかな夜の街の中で、只ひとり淋しさうに壺を眺めてゐるなどといふ事は、私の心を惹いて堪りません。」

さう云つて僕はポケットから自分の名刺を出して、僕はかういふ所のかういふ者です、あなたは私の情人になつて呉れまいか、と頼んでみたのだ。僕は妙な性分で、それだけ云ふともう自分はかういふ女なら自分の女房になつて呉れてもいい、嬢(かかあ)にしてもいいとすぐさう思つて了ふんだ。その時も本気でこの女なら女房になつて呉れてもいいと考へたのだ。しかし、それは云はなかつた。云ふとあとで失敗する事があるからね。只僕は、あなたのやうな人のかういふ途上で見付けた以上、このまま捨てて了ふといふ事は惜しくて堪らぬから、あなたの住所と名前を教へて呉れと云つた。

女は僕が話し掛けた時、鳥渡(ちよつと)身を引いてぢつと僕の顔を見た。それ切り何も云はなかつた。これは君、どういふ徴候か知つてゐるか。女は誰にでも突然口をきかれた時には皆かうするんだ。つまりこちらの第二言を待つんだね。そこで第二言で気に入らなければ女はすすと逃げてゆくよ。もう一度追ひ掛けて云つても、また初めと同じやうに鳥渡身を引いて、それからまたすすと逃げてゆくよ。かうなつてはもう駄目だね。その代り、第二言で女が逃げなかつたらメ(しめ)めたものなんだ。女によると、いつまでしても何も云はずに、ぢつと動かずにこつちを睨みつけてゐるのがあるよ。そんなのに恐れちや駄目だね。それはこちらの言に従はうか従はうまいかと考へ迷つてゐる時なんだ。そこをつけこまなくちや。

僕はその女に更に続けて云つた。

「こんな事を突然云つてあなたには大変御迷惑ですけれど、兎に角僕の云ふ事を聞くだけ聞いて頂けませんか。」

さう云つて僕は歩き出した。歩るき出し乍ら目できつく、ついてこいと命令したんだ。女はついてきたよ。ついてくるにはきまつてるんだ、ここまできると。

僕は女が僕のうしろについてくるのを意識し乍ら、とつと歩いて見付(みつ)つた第一の横道へ折れ曲つた。そしてそこで立つて女のくるのを待つてゐた。女は来た。そこで我々は簡単に情人同志になつて了ふんだ。その夜僕達は急速に身体の関係までもして了つた。

君はこんなにも早く身体の関係が出来て了ふといふのは可笑しいと思ふだらう。実際可笑しいよ。可笑しいけれどもあるんだからね。

さてその女と僕との交渉はどの位続いた？ 三ヶ月。たつた三ヶ月だ。陰気な女でねえ。いや、陰気と云つても別段身を悲しむやうな事を口に出して云つたりする女ぢやないけれどね、しかし兎に角陰気なのだ。それは次の手紙を見て呉れれば分るが、で、女の身分か、身分は僕にも鳥渡(ちよつと)奇異な感じがしたよ、聞いた時。女は妾(めかけ)なんだ。二十一歳で或老人の妾なんだ。ではその女の手紙といふのを見せよう。これは僕との間が疎遠になつてから一

年近く経つて突然女が寄越したものだ。まあ態(てい)のいい呼出し状だね。僕は簡単な返辞を一本やつておいたよ。)

さう云つてBは私にその女の、一年も後になつて突然寄越したといふ手紙を見せた。それは次のやうな文面である。

(妾は最近根岸の主人と別れました。根岸といふのは女の厄介になつてみた主人である。 昨晚妾(わたし)はある夢を見ました。こんなまる一年間も御便りを絶つてみた妾(わたし)が一年振りて手紙を差上げますのに自分の夢の話になぞ最初に申上げるのは失礼でございますが、妾は何故かこの夢の話からでないと私(わたくし)の申し上げ度い事柄が申出せないやうな気が致しますので、こんな夢の話を上申上げるのでございます。私が見ました夢と申しますのは、何処か或る広い所でございましたが、そこでは人達が皆初めて会つた方もずつと以前からの知り合ひでもあるかのやうに親しく懐しく互に手に手をとつてお互の心持を話し合ふ事が出来るのでございました。

「明子さん、あなたは一体此世の中で何が一番仕度(した)うございますか。」と或奥様が妾(わたし)に優しくお訊ね下さいました。

妾(わたし)はかういふやうに、本統に優しく妾の事をきいて下さる人があるのがもう嬉しくて、

「妾でございますか。妾は只もう何もなしにかうして皆様と御一緒に置いて頂けるのが何よりの楽しみでございます。」

さう妾(わたし)はお答へ致しました。実際妾はその時にはさう思ひましたのです。いや、今でも若(も)しあの夢の中でのやうに、人々が本統に心から親しみ合つて下さるのでしたら、妾はやはりさうお答へ申すでせう。すると奥様の仰有るのには

「さう、お淋しい方でございますね。妾(わたし)は只もう早く主人が妾の所へ来て呉れたらと、そればかりが日毎々々の望みでございますの。妾の主人はあの世の中で只妾一人が主人の心の中に住んででもゐるかのやうに妾の事ばかりを気に掛けて呉れます。妾は主人が、妾の側に居ない時でも、妾の主人が何処でどういふ事をしてゐるかといふやうな事が、はつきり解るやうな気が致します。でもやはり主人の一日も早く此処に来る事が待たれて待たれて堪りませんの。」

そして奥様は、今にも主人の来るのを待つかのやうに、目を挙げて妾(わたし)のうしろを御覧になりました。なるほどその夢の中では、皆様が太勢居られました男の方の御姿はたつた一つも見えないのでございます。

妾(わたし)はこの奥様の御言葉を聞いても、別段自分を淋しいなどとは考へませんでした。妾はもう随分永い間、さういふ事に対しては自分を鞭(むちう)

つて参りました。私はもう今ではBさんとああいふ関係に立ち入(い)つた事も別段きびしく自分の誤ちだとも思ひませんし、また根岸の主人の厄介に四年もなつた事も罪だとも思つてをりませんでした。妾は只もう何もなしに皆様の中に交じつてかうして暮らしてゐるのが何よりも楽しい事だとばかり考へてゐるのでございました。

しかし、これは妾の夢でございます。夢は覚めれば消えて了ふものではございませんか。妾は目が覚めてから、別段今の夢と関連して考へたわけでもございませんのでせうが、突然、妙に、まあ自分はなんといふ淫乱な女だらうと、ふと口に出して呟いて了ひました。これは妾が今夢の中で云つた自分の言葉と、実際の自分がして参りました事とを思ひ合はせてふと呟いた事かも知れませんが、実は、妾は初めてあなたにお目に掛つた日の事を自分に思ひ出して呟いたのに相違ございません。あの日の事は実は永い間の妾の苦痛となつてをりましたのでございます。突然街上で会つた見も知らぬ男の方に、すぐその日に身体をまかせて了ふなんて。こんな女が他にございませうか。あなたはあの時分、妾をなんと冷やかな陰気な女だとお腹立ちにおなりでしたせう。けれども実は、妾はあの初めの日の妾の軽るはずみさが、いつまでも私を責め立てて妾に自由な心の熱を与へて呉れませんでした。人は最初が大事でございます。最初の汚れは二十倍の清めを以つてしても洗ひ落せるものではございません。妾はあなたが妾をお遠のきになり出しました時にも、妾からお引とめするだけの元気がどうしても出ませんでございました。あなたはとうとう妾をお遠のきになつて了ひました。

妾(わたし)は先刻書きました通り最近根岸と別れました。これは何もあなたに関係のある事ではございません。只妾は今までのさまざまな愚かな弱さの大胆に気付いて恐しくなつたからの事でございます。妾が根岸の厄介になるやうになつたのは、妾の死んだ母親が病床で病と貧に苦しんでゐた時のことでございます。今はもうその母親も死んで、妾には身寄りの者は只の一人もございません……………。)

Bの見せた女の手紙といふのはこれである。Bは私が読み終ると颯爽として云ひ放つた。

「つまり復縁状なんだね。自分を汚した以上自分を捨てるな、といふ意味なんだね。殊に根岸に別れたといふ所などはね。それからまた弁解もあるね、つまり自分は母の為に犠牲になつたといふ。ね、さうぢやないか。」

「違ふ、違ふ。」

と私はBに皆まで云はせずにその時口を切つた。「君は悪いとり方ばかりをする。さうぢやないんだ。これにはその女の人の苦しみが出てゐる。この人は

苦しんでゐるんだ。だがこんな立派な心の人がどうしてそんな誤ちをしたんだらう？」

さう私は口に出して云つたが、またすぐそれを打消すやうにして云つた。

「いや、この誤ちは非常に美しい誤ちだ。この人は自分の夢を実現しようとして君に身をまかせたのだ。何故かと云へばこの人は手紙にも書いてある通り、非常に不運な境遇にゐるので、まだ人の優しい愛を受けた事がなく、秘かにそれに憧れてゐたのだ。けれどもそれが得られないので、黄焼の壺を眺めたり、さういふ静かな楽しみを自分で作つてゐたのだ。彼女はきつと草木を眺めるのも好きだつたらう。また犬や猫やさういふ動物と遊ぶのも好きだつたらう。きつとさうだつたに違ひない。そこへ君が現れたのだ。あの人は君があの人を気に掛けてくれたのが嬉しかつたあまり、ついすぐに身体をも許して了つたのだらう。かういふ誤ちは誰にもある事だ。だが、可哀さうに今ではもう諦めてゐる。他人の愛といふものに諦めてゐる。そしてその代り自分の天国を作つてゐる。かういふ人に幸あれ、だ。」

さう私は叫んで、前の、やはり自分のかねてからの望みを実現しようとして、颱風のすぎたあとの水かさの増した水溜りで、誤つて感電して死んだ男の人の事を思ひ出し、あのやうにして死んだ人もあり、このやうにして生きてゐる人もあると思つたら、なんだか此(この)陳腐極まる感想が私には妙にヒシヒシと身に感じられてくる思ひがした。

(大正十四年九月「文壇時代」)